

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | 言語文化学 Vol.3 編集後記  |
| Author(s)     | 津久井, 定雄   |
| Citation      | 大阪大学言語文化学. 3 p.187-p.187  |
| Issue Date    | 1994-03-31  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/78168">https://hdl.handle.net/11094/78168</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 編集後記

編集に携わってみて、「言語文化学」の充実のためにこの学会誌の役割の大きいことを実感した。寄稿者も査読者も何らかの意味で言語文化学の学問としての在り方を意識しなければならず、その過程で「ウチ」の了解が「ソト」向けの発信として適切であるかどうかという篩がかけられるからである。言語文化学は多方面のテーマを許容し、この意味でたしかに間口が広いが、論文としてまとめるときにはしっかりした方法論が要求されることはいうまでもない。否、むしろ幅が広いがゆえに、旧来の学問以上に方法論的な考察が求めらるとする方がより適切であろう。方法論が抜け落ちると、いかなる力作であろうともディレクタントイズムの蛮勇にすぎないものになる。伝統的な学問分野から、言語文化学のディシプリンとは何かという問が投げかけられることがあるが、学会誌はまさにディシプリンのための貴重な場である。流行の「インターディシプリナリ」の蔭の実直な裏方であるといえまいか。(津久井)

1994年3月